

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2170200642		
法人名	医療法人社団 崇仁会		
事業所名	洞戸グループホーム 天津風		
所在地	岐阜県関市洞戸大野852-1		
自己評価作成日	平成23年7月1日	評価結果市町村受理日	平成23年9月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokouhyou.jp/kai.gosi.p/informationPublic.do?JCD=2170200642&SCD=320&PCD=21
----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 旅人とたいようの会		
所在地	岐阜県大垣市伝馬町110番地		
訪問調査日	平成23年7月21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者や介護者が本来持っている力を最大限に有効活用できるような生活の場であり、働く場であること。また、あたたかく明るい介護サービスが提供され本人も家族も最期を迎える時に笑顔で「ありがとう」とおもえるような終の棲家を目指している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

利用者が重度であったり、終末期となっても入居が可能な、医療体制が整備された安心できる事業所である。開設者夫妻は医師であり、正職員の看護師も配置されている。更に必要に応じて母体の医療機関の各科医師や近隣の協力病院との連携が整っている。看取りの必要性が生じた場合は24時間連絡体制が確保されており、何度も家族と話し合いを行い方針を決め対応している。管理者は、「本人、家族、職員等関わった人々が最期まで笑顔で迎えられるようなサービスを提供したい」との願いがある。夜間想定避難訓練を毎月実施しており、全職員が経験することで、速やかに全員を避難できる体制が出来ている。管理者を初め全職員が利用者と家族の夢をかなえる「夢プロジェクト」の実現に向け協力してサービスの向上に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎日申し送りを行う玄関スペースに理念を掲示して、職員の意識に入るようにしている。	地域の人々と共に、自分らしい生き方を支える為の理念を掲げ、管理者・職員で共有している。また、日々のケアの中で、利用者の目線に立ち、寄り添いながら理念を実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元の自治会に加入しているが、地域との交流は、あまり行われていない。	保育園や小中学校、高校等や各団体のボランティアや郡上踊り保存会等を受け入れている。地元の神社の祭事にも参加している。管理者は雪解け等の協力を自治会に申し入れ働きかけをしているが、協力が少なく、地域との日常的な交流には至っていない。	地縁の強い土地柄であるが、地元の職員も多いので、繋がりを活用したい。また、事業所自体が積極的に地域の一員として日常的に交流を深めることを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	企画は運営推進会議で提案したが、実行されていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	参加メンバーからの意見は、できるだけ取り上げて、運営に活かすようにしている。	運営推進会議はおおむね2ヶ月に1回開催し、家族、自治会の住民や市の高齢福祉課職員に事業所の活動状況を報告し、要望や助言を受けている。防災対策について、地域との連携について話し合っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	2ヶ月に一度発行の「天津風だより」を配布することで介護の様子などの情報を発信している。これは、法人のホームページからも閲覧可能になっている。	市には「天津風だより」を定期的に送付し、隔月発行の母体医療施設の広報誌等を持参する際に情報交換している。事故や感染症等の質問や他市町村の情報等を連絡したり双方向の話し合い関係を築き上げている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事故予防のために一時的、限定的に家族の同意の下にやむをえず行うことがある。カンファレンスにて定期的に話し合い身体拘束をしない方向性を探り日常に活かしている。	ベッドから転落の危険のある利用者の居室にマットレスを敷いたり、点滴を抜く可能性のある利用者に常時見守る職員を配置して拘束をしないケアを心がけ実践している。やむを得ず拘束が必要になった場合は、家族に説明し同意を得てカンファレンスで拘束しない方法を模索している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員間で関連した記事の閲覧を行い知識の周知を図っている。		

洞戸グループホーム天津風

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入居者ひとりにつき担当の職員が2人つくようなしくみで、定期的なアセスメント結果を皆で共有化することで複眼的に考え、活用できる制度があれば利用していく方針である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には時間をかけて説明を行い、改定を行う時には事前に連絡し、同意を得た上で改定を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月1回家族への個別だよりを担当者が送り、家族からはそれに対する意見を返信できるように双方向のコミュニケーションツールとしてハガキを添付している。入居者ひとりに対し、専属の職員2人が担当する個別ケアを行っている。	2人の職員が1人の利用者を担当することにより家族と信頼関係を築き、意見や要望を伝え易いようにしている。月1回送付する職員手書きの「個別だより」に返信用はがきを添え、意見や要望等問いかけ運営に反映させるように工夫している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1回行うカンファレンスの場で職員同士の意見を出し合い、運営に反映させている	毎月、全職員による職員会議を開催し、意見や提案を出し合っている。職員間の風通し良い関係づくりや勤務体制、ケアの方法について話し合い運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	できるだけ機会均等と公平な評価を行えるよう心がけているが、法人の方針もあり独断では決められないこともある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修などの案内を回覧し、研修費の補助や休暇の優遇などもあり、自主的に必要な研修に参加は可能な体制が整っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	一部の職員が自主的に交流を行いネットワークを作ったことはあり、相互の訪問が可能になった。自主的に交流する機会はあるが、積極的に行う職員は少なく受身的である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の訴えを傾聴し、できるだけ孤立しないように他の入居者との橋渡しの役割を職員が行ってういる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人の生活状況を月に1回「個別だより」に載せて家族に送っている。主治医等からは健康面での経過を知らせるしくみがあり、本人に関する情報の共有化を行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ケアマネを中心にアセスメントを行い、入居者の視点に立った提案をさせていただくよう心がけている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者の視点に立った介護が必ずしも行われているとは言えず、改善の余地はある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者の視点に立った介護が必ずしも行われているとは言えず、改善の余地はある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人に面会に訪れた家族等とコミュニケーションを取っていく中で得られた情報を元に、個別ケア担当者が中心になり本人の夢を実現させるべく「夢プロジェクト」という機会を設けている。	ボランティアや他の利用者の訪問者が知人であることも多い。お墓参りや自宅へ帰る希望等を提案してもらい、利用者家族の夢をかなえる「夢プロジェクト」を協力して実現し、馴染みの関係継続を支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々の作業等を共同で行うこと、また、食事の場所をローテーションで変わることにより入居者同士の係わり合いが偏らないように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	死亡退去された入居者には49日と一周忌には生花を送り、お悔やみしている。退去されたあとも家族がおとづれるケースもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	担当の職員が本人、家族等と話し合い暮らし方の希望や意向を把握するように努めている。ケアマネもプランの同意を得る時などに家人からの要望等を伺うことにしている。	日々の生活の場面での表情や言動から思いを把握している。2人の職員が1人の利用者を担当し、年に1回利用者と家族の希望をかなえる「夢プロジェクト」を企画し、お墓参りや外食、買い物等の実現に向けて家族と協力し支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の調査で家人や本人から得られた情報を共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日のバイタルチェックや医師の往診等で得られた医療面での情報や毎日のADLの変化を申し送りの中で共有し、状況の変化に対応している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネ、個別ケア担当者が中心になり、本人や家族とのコミュニケーションを取りアセスメントを取り経過報告し、計画作成と介護を支援している。	担当職員が中心となり把握した利用者の現況、家族の希望を踏まえて全職員参加のカンファレンスで検討し、介護計画を作成している。モニタリングを実施して3ヶ月毎及び随時(終末期は頻繁に)見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別ケア担当者が中心になって、アセスメントを3ヶ月に1回取り、カンファレンスにて他の職員に発表し情報の共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズに対しては、迅速に対応しようと試みているが、それが既存のサービスにとらわれているかどうかという視点では見ていないし、その必要もないと考える。		

洞戸グループホーム天津風

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	保育園や診療所などの活用、高校生のインターンシップやボランティアの受け入れを行い、多様なニーズに答えようと試みている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医は、選択できるようなしくみになっており入居時に確認し、支援している。	かかりつけ医である開設者が隔週1回往診の外、地元の医院や協力病院に受診する時は職員が付き添う時もある。また、母体医療機関の各科担当医師といつでも相談できる関係を築いている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療依存度が高い入居者が多いため、看護師や看護職は協働することが日常になっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院等のソーシャルワーカーは、ここでのような患者が受け入れられるかを把握していただいております。必要時には相互に連絡を取り、迅速な情報交換を行い、入退院に滞りがなく本人や家族が不安なく移行できるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	日々の健康状態を観察し、介護の経過を元に支援し、家族との連絡を密に取り、現状の把握と状況の変化を受け入れやすくするよう心がけている。医師からの説明も変化があるたびに行われている。	入居時に重度であったり、将来、終末期を迎えることになったとしても安心できる方針を説明している。重度化した場合は本人、家族、医師と何度も相談し話し合い、本人や家族の希望に添った最期を迎えられるよう支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	夜間帯に急変や事故が発生してもすべての職員が対応できるようにしているし、それができなければ務まらないような重度な方が多い環境を乗り越えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	月に1回の自主訓練と年に2回の消防署立会いの避難訓練を実施しているが、地域との連携はこれからである。	夜間想定避難訓練を毎月実施しており、全職員が年に1度は経験し、夜勤者2人で10分以内で利用者全員を避難できる体制が出来ている。3ヶ月分の十分な備蓄を準備しているが、高齢化地域の為住民の応援を得られていない。	管理者は自然災害(洪水、土砂災害)が起きた場合、孤立する危険性を危惧している。具体的事例を想定し、消防署等関係機関とのネットワークづくりを企画しているため、早期に実現出来るよう期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日常生活の中で個人の個性や経験に配慮して対応している。また、カンファレンスで個別ケアについて話し合い対応や声かけの方法等を確認し合っている。	書類は氏名が見えないように配慮があり、写真や氏名の掲載は、利用者・家族の希望を確認してから掲示している。入居している利用者、家族同士においても互いのプライバシーが保てるよう配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一方的に誘導するのではなく、自分で意思決定できるように心がけているが思いが伝わらない場面もある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者の希望を聞き、その人のペースに合った生活を送っていただくようには心がけているが、共同の生活の場であるという制約により、本人の自由はある程度制限される。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時や入浴後の整髪や化粧などで気分がよくなるように心がけている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の下準備や湯のみ洗いなどの手伝いのできる方にはしていただきオープンキッチンを活かして調理の担当者と入居者が会話できるような構造にしている。	利用者は、オープンキッチンで調理担当職員と会話を楽しみながら、材料の下処理や準備、食器洗いをしている。誕生日には好きな食事をリクエストして提供するという企画もあった。食材はできるだけ無添加で安心して安全な自然栽培のものを使用し、その方の状態に合わせた食事を提供している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者個々の健康状態やADLの変化に応じた食事の形態の変化や水分摂取の方法を変えバランスが取れるように心がけている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、自力または介助にて口腔ケアを行い、義歯の方は夜間中に洗浄剤でしっかり洗浄・消毒などを行っている。		

洞戸グループホーム天津風

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンは24時間体制でチェックし、排泄の異常の有無を確認し、対策を行っている。また、この情報によりオムツの使用量や形態、排泄の適切な誘導時間等を把握し、支援を行っている。	排泄チェック表から排泄パターンを把握し、オムツを減らしトイレでの排泄を目指し誘導している。3ヶ月毎のカンファレンスで意見を出し合い、オムツからトイレ等に移行するなど自立できるよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘回避の方法として医師の指導による食事のメニューや形態に変化をつけること。腸の運動を促すリハビリを試みている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の形態や時間は本人の健康状態やADLで決まっており、曜日や時間帯は本人は選べないが、決まった時間帯の中での希望はできるだけ取り入れるようにしている。	隔日の入浴を行い、重度化した場合は機械浴でも可能である。夜間の入浴希望者には、職員を加配するなど取り組む体制がある。ゆず、菖蒲湯の他、管理者のブレンドしたバスオイルを使用し楽しめる工夫をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	体調やADL等にに合わせて、居室での仮眠時間を取れるように設定している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居の際に出される定期薬の情報や健康面での変化による薬の変化は、看護師より情報提供されるが、3ヶ月に1回の割りでは個別ケア担当者がさらにアセスメント結果を発表することで情報を共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日の洗濯物の整理や食材などの下処理、月に1度の掲示物作成への参加、外気浴などで気分転換を図っている		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	できるだけ気候、天気の良い日には外気浴を行っている。また、本人や家族の希望を募り外出行事を行い、年に数回は、盆踊りなどを開催し、地域の方の参加も呼びかけている。	外気浴として定期的に行っている。車椅子使用の利用者が多いが、月1回の喫茶店での食事やあじさい祭りなど地域の行事に参加している。また、「夢プロジェクト」で家族と協力してお墓参りに出かけりしている。	

洞戸グループホーム天津風

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個々の能力に応じて小額のお金を持つことを許可しているが商店等が近くにないため使う場面がほとんどない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	できるかたには、電話をかけたり手紙を書いたりすることは、自由に行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	テーブルや入り口には季節感のある花を飾り、トイレには識別のための色の表示をし、入居間もない方の不安等を軽減するように心がけている。共用の場所は衛生管理に気を配り、温度や匂い等で不快感のないように気をつけている。	建物は天然木、自然素材で建造され、2ユニット共有の食堂兼居間は、開放感のある吹き抜けで光が差し込み、心地よい空間となっている。利用者の作品を掲示し、随所にソファを配置し、利用者が思い思いの場所で過ごせるよう工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者は自由に居場所を選べるしくみになっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居以降、家族の協力の下、本人の不安を減らすように馴染み家具や調度品、愛用のものや家族の写真等を持参していただく場合もある。	居室には愛用の筆筒、テーブルや椅子、仏壇等思い思いのものが持ち込まれている。自分の部屋として、その人らしさを大切にしながら落ち着いた空間となるような配慮がある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	動線の確保と視認性のよい配置にしており、プライバシーの確保と安全性を考慮しているが、介護者の死角もまだある。		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2170200642		
法人名	医療法人社団 崇仁会		
事業所名	洞戸グループホーム天津風		
所在地	岐阜県関市洞戸大野852-1		
自己評価作成日	平成23年7月1日	評価結果市町村受理日	平成23年9月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokouhyou.jp/kai/gosip/informati.onPublic.do?JCD=2170200642&SCD=320&PCD=21
----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 旅人とたいようの会		
所在地	岐阜県大垣市伝馬町110番地		
訪問調査日	平成23年7月21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎日申し送りを行う玄関スペースに理念を掲示して、職員の意識に入るようになっている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元の自治会に加入しているが、地域との交流は、あまり行われていない。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	企画は運営推進会議で提案したが、実行されていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	参加メンバーからの意見は、できるだけ取り上げて、運営に活かすようにしている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	2ヶ月に一度発行の「天津風だより」を配布することで介護の様子などの情報を発信している。これは、法人のホームページからも閲覧可能になっている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事故予防のために一時的、限定的に家族の同意の下にやむをえず行うことがある。カンファレンスにて定期的に話し合い身体拘束をしない方向性を探り日常に活かしている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員間で関連した記事の閲覧を行い知識の周知を図っている。		

洞戸グループホーム天津風

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入居者ひとりにつき担当の職員が2人つくようなしくみで、定期的なアセスメント結果を皆で共有化することで複眼的に考え、活用できる制度があれば利用していく方針である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には時間をかけて説明を行い、改定を行う時には事前に連絡し、同意を得た上で改定を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月1回家族への個別だよりを担当者が送り、家族からはそれに対する意見を返信できるように双方向のコミュニケーションツールとしてハガキを添付している。入居者ひとりに対し、専属の職員2人が担当する個別ケアを行っている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1回行うカンファレンスの場で職員同士の意見を出し合い、運営に反映させている		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	できるだけ機会均等と公平な評価を行えるよう心がけているが、法人の方針もあり独断では決められないこともある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修などの案内を回覧し、研修費の補助や休暇の優遇などもあり、自主的に必要な研修に参加は可能な体制が整っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	一部の職員が自主的に交流を行いネットワークを作ったことはあり、相互の訪問が可能になった。自主的に交流する機会はあるが、積極的に行う職員は少なく受身的である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の訴えを傾聴し、できるだけ孤立しないように他の入居者との橋渡しの役割を職員が行ってういる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人の生活状況を月に1回「個別だより」に載せて家族に送っている。主治医等からは健康面での経過を知らせるしくみがあり、本人に関する情報の共有化を行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ケアマネを中心にアセスメントを行い、入居者の視点に立った提案をさせていただくよう心がけている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者の視点に立った介護が必ずしも行われているとは言えず、改善の余地はある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者の視点に立った介護が必ずしも行われているとは言えず、改善の余地はある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人に面会に訪れた家族等とコミュニケーションを取っていく中で得られた情報を元に、個別ケア担当者が中心になり本人の夢を実現させるべく「夢プロジェクト」という機会を設けている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々の作業等を共同で行うこと、また、食事の場所をローテーションで変わることにより入居者同士の係わり合いが偏らないように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	死亡退去された入居者には49日と一周忌には生花を送り、お悔やみしている。退去されたあとも家族がおとづれるケースもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	担当の職員が本人、家族等と話し合い暮らし方の希望や意向を把握するように努めている。ケアマネもプランの同意を得る時などに家人からの要望等を伺うことにしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の調査で家人や本人から得られた情報を共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日のバイタルチェックや医師の往診等で得られた医療面での情報や毎日のADLの変化を申し送りの中で共有し、状況の変化に対応している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎日のバイタルチェックや医師の往診等で得られた医療面での情報や毎日のADLの変化を申し送りの中で共有し、状況の変化に対応している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別ケア担当者が中心になって、アセスメントを3ヶ月に1回取り、カンファレンスにて他の職員に発表し情報の共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズに対しては、迅速に対応しようと試みているが、それが既存のサービスにとらわれているかどうかという視点では見ていないし、その必要もないと考える。		

洞戸グループホーム天津風

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	保育園や診療所などの活用、高校生のインターンシップやボランティアの受け入れを行い、多様なニーズに答えようと試みている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医は、選択できるようなしくみになっており入居時に確認し、支援している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療依存度が高い入居者が多いため、看護師や看護職は協働することが日常になっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院等のソーシャルワーカーは、ここでのような患者が受け入れられるかを把握していただいております。必要時には相互に連絡を取り、迅速な情報交換を行い、入退院に滞りがなく本人や家族が不安なく移行できるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	日々の健康状態を観察し、介護の経過を元に支援し、家族との連絡を密に取り、現状の把握と状況の変化を受け入れやすくするよう心がけている。医師からの説明も変化があるたびに行われている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	夜間帯に急変や事故が発生してもすべての職員が対応できるようにしているし、それができなければ務まらないような重度な方が多い環境を乗り越えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	月に1回の自主訓練と年に2回の消防署立会いの避難訓練を実施しているが、地域との連携はこれからである。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日常生活の中で個人の個性や経験に配慮して対応している。また、カンファレンスで個別ケアについて話し合い対応や声かけの方法等を確認し合っている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で個人の個性や経験に配慮して対応している。また、カンファレンスで個別ケアについて話し合い対応や声かけの方法等を確認し合っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者の希望を聞き、その人のペースに合った生活を送っていただくようには心がけているが、共同の生活の場であるという制約により、本人の自由はある程度制限される。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時や入浴後の整髪や化粧などで気分がよくなるように心がけている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の下準備や湯のみ洗いなどの手伝いをできる方にはしていただきオープンキッチンを活かして調理の担当者と入居者が会話できるような構造にしている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者個々の健康状態やADLの変化に応じた食事の形態の変化や水分摂取の方法を変えバランスが取れるように心がけている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、自力または介助にて口腔ケアを行い、義歯の方は夜間中に洗浄剤でしよう洗浄・消毒などを行っている。		

洞戸グループホーム天津風

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンは24時間体制でチェックし、排泄の異常の有無を確認し、対策を行っている。また、この情報によりオムツの使用量や形態、排泄の適切な誘導時間等を把握し、支援を行っている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘回避の方法として医師の指導による食事のメニューや形態に変化をつけること。腸の運動を促すリハビリを試みている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の形態や時間は本人の健康状態やADLで決まっており、曜日や時間帯は本人は選べないが、決まった時間帯の中での希望はできるだけ取り入れるようにしている。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	体調やADL等に合わせて、居室での仮眠時間を取れるように設定している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居の際に出される定期薬の情報や健康面での変化による薬の変化は、看護師より情報提供されるが、3ヶ月に1回の割りで個別ケア担当者がさらにアセスメント結果を発表することで情報を共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日の洗濯物の整理や食材などの下処理、月に1度の掲示物作成への参加、外気浴などで気分転換を図っている		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	できるだけ気候、天気の良い日には外気浴を子なっている。また、本人や家族の希望を募り外出行事を行い、年に数回は、盆踊りなどを開催し、地域の方の参加も呼びかけている。		

洞戸グループホーム天津風

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個々の能力に応じて小額のお金を持つことを許可しているが商店等が近くにないため使う場面がほとんどない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	できるかたには、電話をかけたり手紙を書いたりすることは、自由に行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	テーブルや入り口には季節感のある花を飾り、トイレには識別のための色の表示をし、入居間もない方の不安等を軽減するように心がけている。共用の場所は衛生管理に気を配り、温度や匂い等で不快感のないように気をつけている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者は自由に居場所を選べるしくみになっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居以降、家族の協力の下、本人の不安を減らすように馴染み家具や調度品、愛用のものや家族の写真等を持参していただく場合もある。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	動線の確保と視認性のよい配置にしており、プライバシーの確保と安全性を考慮しているが、介護者の死角もまだある。		